
最終舞台は華やかに

国沢裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最終舞台は華やかに

【Nコード】

N0823D

【作者名】

国沢裕

【あらすじ】

私が転入した先での高校では定期試験が終わり、これからしばらく、校内では文化祭の話題で持ちきり。私のクラスでは、舞台をする事に決定。でも、当然事件が起こらない訳がなく…。SF小説シリーズ2作目となる「文化祭編」。

チャプター・1（前書き）

この小説では、基本的にチャプター後に書かれている人物による、一人称交代方式をとっています。

チャプター・1

街灯だけが人の気配のない通りを照らしている。夜十時を回った静かな住宅街。

その一角の、ある家の二階に明かりがついている部屋がある。

部屋の中は、二人。

一人は、黒ぶち眼鏡をかけた黒髪・黒い瞳の真面目そうな、まだあどけないような雰囲気のある少年。体躯が細身で、それほど背も高くないが、机の上には高校生が学ぶ教科書らしき英語の本が広げられ、熱心に目を走らせている。

その横で、こちらは茶髪のすらつとした感じのする少年が、数学の教科書をぱらぱらとめくっていた。その手が、ふと止まる。

「なあ、この問題、どうしてもわかんねえんだけどさあ」

茶髪の少年が色素の薄い茶色い瞳で様子を伺うように、黒髪の少年の方へ教科書を向ける。

「どれ」

黒髪の少年は、数学の問題文を読みながら考える。……こいつはいつも自分で解けるくせに、試すような感じで発展問題ばかり聞いてくる。実際これは、試験には出そうにもない問題だ。

それでも真剣に、ノートに左手で数式を書きはじめた少年の顔を、遠慮なく眺める茶髪の少年。

その視線に気が付いたか、顔を上げずに黒髪の少年は言う。

「……何？ 人に問題を解かせといて」

無愛想に聞く黒髪の少年の眼鏡を、いきなり取ってみる。
むっとした表情で顔を上げた少年と視線がぶつかる。

「……おまえ、もしかしたら、すっげえ美人？」

茶髪の少年の言葉に、黒髪の少年は薄く笑って答える。

「……何だ。今頃気が付いたのかよ」
二人が見つめ合う、その時。

「あなた達、いい加減にしなさい！」

二人の背後から、夢乃の怒鳴り声が響いた。

「全くもう！ あなた達の冗談が通じない子だっているんだから！」
部屋の入り口で仁王立ちをしている夢乃の後から、ほーりゅうは
ワクワクとした雰囲気で大きなお盆を持って入って来た。

「なに？ なに？ BL？ 現物見るの、初めて！」

「ほーりゅう、冗談よ！ 困った人達なんだから」

文句を言いながら夢乃はテーブルに寄って来て、皆の分の日本茶
を入れ始める。

「おっ、夜食が来た来た！」

嬉しそうにお盆を覗き込んだ茶髪の少年・京一郎は、そのまま固
まった。

「……？ どうした」

京一郎の後ろから黒髪の少年・ジプシーが訝しげに声をかける。

京一郎は、ほーりゅうを見ながら、お盆の上を指差して言った。

「夢乃のおにぎりはわかる。いつも見慣れているからな。……これ
は、何？」

ほーりゅうは、ぷつとフくれた。

「夢乃とおんなじ、おにぎりですっ！ 中身も一緒、鮭とおかかの
二種類よ」

お盆の上に乗っているのは、綺麗な三角に握られたおにぎりと、
大きなまんまとしたご飯のかたまり。

女の子二人が、試験前の勉強会の夜食にと作ってくれたおにぎり
だが。

「どうぞ遠慮なく召し上がってくださいなあ」

そう言って、夢乃の作ったおにぎりを取ろうとしたほーりゅうの
手を、京一郎は、ぺしっと叩き落した。

「何すんのよ！」

「お前、明日の試験の教科、範囲の半分も勉強が進んでないだろ！
夜食は後！ 胃に血液が回る前に勉強！」

京一郎の言葉に、ほーりゅうがむっとした。

「やだあ。お腹すいた！」

「お前、夢乃の家で夕食をご馳走してもらって、たらふく遠慮なし
に食っていたじゃねえか！ この俺様が貴重な試験前日の時間を割
いて教えてやろうつてのに。ほら、ここ座る！」

ぴえーと泣き言を入れつつ、京一郎に勉強を教えてもらい始めた
ほーりゅうを横目でみつっ、ジプシーはおにぎりを手に取った。当
然夢乃が作った方である。

おにぎりを食べながら、この中間試験が終ったら次は文化祭の準備で忙しくなるんだなと、彼はもう先の事を考えていた。

チャプター・2 ほーりゅう

「うそだぁ！」

私は開いた口がふさがらないまま、廊下に貼り出されていた各学年ごとの中間試験の成績総合順位、上位五十名の発表を眺めていた。しばらく眺めていた私の頭を、ジプシーがプリントの束で叩いて通り過ぎた。

「口、あけ過ぎ」

私は、慌ててジプシーの後からついて行き、教室に入る。成績発表には興味の無さそうな夢乃と京一郎が窓際にいた。京一郎に近づいて行つて不満をぶつける。

「夢乃が一番、ジプシーが二番つてのはわかる。何で京一郎が学年で九番なのよ！」

「勉強してるからに決まつてんだろ」

にべもなく京一郎は答える。それでは私の納得がいかない。ちょっと声を落として、京一郎を睨むように言った。

「あんた、よく学校をサボつてる不良なんでしょ？ 何で勉強できるのよ」

「そりゃあ、要領よくポイントを抑えて勉強しているからだ。家では自由にさせてもらっているし。やりたい事を制限・剥奪されないようにする為には、俺は勉強もするさ。試験前日には、お前にも勉強を教えてやったはずだろ」

夢乃が続けて言った。

「ほーりゅう、あなた、京一郎を見た目で言っているでしょう？」

……京一郎の髪の色、天然の茶色なのよ」

……それは知らなかった。てっきり染めているのかと思っていた。京一郎の茶髪は自前かぁ。そう言われてみれば瞳も色素が薄く、黒目部分が茶色に見える。

そばで椅子に座つて会話を聞いていたジプシーが、手元のプリン

トに目を通しながら言った。

「京一郎の姉貴も茶髪で色白の美人だ」

「お姉さん、いるんだ！」

それは初耳。きつと京一郎と似ているんだろうな。一回会ってみたい。

「今、会ってみたいとか思ってたねえ？」

「うまい具合に京一郎が聞いてきた。」

「とっても見たい！」

「見たいって、お前なあ。……姉貴は親父の組を継ぐ気満々の、ばりばりの極道女だが、それでも本当に会いたいのか」

「……遠慮させていただきます」

私はすぐさま辞退した。

体育の時間は身長順の関係で、明子ちゃんと組んで柔軟をする。

あの出来の良い三人に勉強の愚痴をこぼすと、スパルタ式教育法になりかねないので、明子ちゃんに愚痴を言ってみる。

「結構レベルの高い、この高校への転校なんて、親のコネよお。前の学校では品行方正で先生の受けが良ければ、学力関係なく、ある程度うまくやれたんだけどさあ」

「でも、今回の試験で追試は無かったんでしょ？」

「まあね」

「何はともあれ、無事に試験が終ったんだから、これからは文化祭の準備で忙しくなるわよ」

「文化祭？」

「そう、文化祭」

「……この時期に？」

私は転校前の学校で6月に文化祭をしていたので驚いた。明子ちゃんが笑いながら説明してくれる。

「この学校は進学校になるから、本当は秋に文化祭って変な感じなんだけれどね。でも、実行委員は生徒会員で夏に全員二年生に代替

わりしているし、三年生にとっては勉強の合間の息抜きになるみたい」

明子ちゃんが急に目を輝かせながら、ちょっと小声になって言った。

「こここの高校の文化祭、毎年最後に打ち上げっぽく舞台で在校生のグループライブがあるんだけど、今年はすごい楽しみにしているんだ」

「？」

明子ちゃんの事だ。かつこいい男の子でも出るんだろうか。

「本当はそのライブ、在校生だけが登録して出られるんだけど、去年、外部からの飛び入りがあったのよ。私、去年は中学生だったけれど、そのライブまで残っていて見たら、その飛び入りのグループのボーカルが、超かつこよかったの〜！」

……やっぱり。

「そのボーカルの子が最後に、来年も会おうって言ったんだ！ きっと今年は、そのグループ、在校生として出て来るんだと思うな！」

「それって、じゃあ今年入った一年って事になるよね？ 誰とかつて、わからないの？」

「うん、遠目だったし、サングラスしていたんだ……。でも、かつこ良さはわかるんだよねえ」

明子ちゃんは嬉しそうに話していたが、私は他の事が気になったので聞いた。

「でも、それって後夜祭でしょ？ 昼間の文化祭では何をするの？ うちのクラス、何か当たってたっけ？」

「うちの学校の文化祭はテーマを作って、その内容に統一するんだって。今年のテーマは、<おとぎの国>らしいよ」

「おとぎの国？」

「で、うちのクラス、委員長が舞台の権利を取ってきてくれたから、メルヘンチックな舞台が出来るう！ すっこい楽しみ！」

……確かにウチのクラスは、舞台栄えのする見目良い男子達が多

そうだが。明子ちゃん、すっごく嬉しそうだな。なんか企んでいそう……。

チャプター・3 ほーりゅう

「去年の後夜祭ライブに出てきた飛び入りグループ？」

夢乃が聞き返してきたので、私は続けて言った。

「そう。とつてもかつこいいグループだったらしいんだ！ 明子ちゃんが今年も出るはずって言うんだけど」

夢乃は、うーんと考えながら紅茶を入れる。

私は夢乃の家で、学校帰りにお茶をする習慣が出来ていた。居間では、夢乃お気に入りの紅茶・マリアージュ・フレールのマルコ・ポーロの香りが漂い始める。そのそばで、京一郎とジプシーが何処からかギターと楽譜を持ってきて、なにやらいじっている。

「確かに、格好良かったグループかと聞かれれば、その場の雰囲気もあるからね。そう見えたかな」

「え？ 夢乃も去年、そのグループを見たの？」

「去年のこの時期には、私はもうこの高校を受験する気でしたから、下見がてら文化祭に行ったのよ。続けて後夜祭も全部みたわね」

「へえ」。……私もそのグループ、見たいな！ 今年も出るんかな？」

夢乃はお盆にストレートティを二つのせて、京一郎達に運びながら聞いた。

「今年も出るわよね」

「出るよ」

「出る出る」

二人の声が上がる。

……何で、京一郎とジプシーが、はつきり断言するんだろう。

「その顔、わかってねえだろ」

京一郎が、私を振り返って言った。わかっていない。というか、今思い当たったが、まさかなあ。

「去年飛び入りしたのは俺らだよ」

ちよつと、いや、かなり自慢げに京一郎が言った。

「……うつそだぁ」

こいつら、頭が良い上に、人に聴かせられる位の音楽まで出来るのか？ それに聞いた話では、京一郎とジプシーは違う中学出身のはず。なんで去年グループを組んで出られるの？

「……クラスの連中、お前と同じで、高校で俺らが初めて顔を合わせたと思ってんじゃねえの。学校だけが付き合いの場じゃねえからな。俺らが出会ったのは、二年……二年半位前か」

音の調律をしているジプシーが、顔を上げずに言う。

「中二の夏前位だったな」

そうか。皆、高校に入る前からの知り合いだったんだ。バンドつながりかな？

そう思ったので、京一郎に聞いてみた。

「いや、それは単なる共通の趣味の一つ。結構俺ら、重なる趣味が多くてさ」

そう言いつつ、嫌そうに京一郎が続ける。

「こいつと勝負モノで競って、剣道以外で勝てた事がないのが気に食わねえ」

私は笑いながらも感心しつつ言った。

「へえ……ジプシーって、勉強や音楽だけじゃなくて何でも出来るんだ。って、京一郎は剣道するんだ」

「剣道だけは、小さい頃から親に習わされていたからな。……そうそう、去年の後夜祭は、俺の先輩がお膳立てしてくれたから、飛び入りで出られたんだよ。今年は在校生だから、正式に申し込めるよなぁ」

……京一郎の先輩とは、やっぱり族の方ですか……。聞かないでおこう。

「でも、うちのクラス、文化祭で舞台するって聞いたし、委員長としてはジプシー、忙しくなるんじゃない？ いろいろ練習もしない

といけないんですよ」

私は、紅茶に砂糖を二杯入れてぐるぐるかき回しながら言った。
フルーティーな香りが立ち上る。私の言葉を聞いているのかいない
のか、ジプシーの返事は無い。

代わりに夢乃が、小さな声で私に言った。

「ジプシーは、忙しい毎日がいいのよ。わざと用事を入れて忙しく
している。……余計な事を考えなくて済むから」

……そんなに青春時代を一生懸命しなくても。いや、青春時代だ
から一生懸命するのか。でもまあ、なんでも出来る人は忙しいんだ。
もう少し、のんびり過ごす時間があってもいいのにな。

チャプター・4 ジブシー

文化祭では、クラスの女子の達での希望で、クラスで舞台をする事が決まっている。

今年の文化祭テーマが「おとぎの国」というお題をつけて、今日の、このホームルームで、「ロミオとジュリエット」をやるとも決まった。だが。

「皆、冗談言っていないませんか？」

クラス委員長なのでホームルームの進行をしていた俺の言葉に、クラスの殆どの女子が、ふるふると顔を振る。そして一人の女生徒が、おそらくクラスの女子の意見を代表して言う。

「私達クラス全員が、演劇部員もない素人なので、シリアスなんて出来ないと思うんです。だからお笑い路線でと」

「……で、何故、僕ですか？」

誰の返事もない。この成り行きを楽しそうに、ほーりゅうと京一郎が黙って俺を見ているだけだ。夢乃は黒板の前で、チョークを片手に心配そうな顔をしている。俺は重ねて言った。

「僕は、この配役の投票の結果は、クラスの女性に対して失礼と思うんですが。何でジュリエットが僕なんですか？ ロミオ役の城之内君はいいとして」

別の一人の女生徒が言った。

「私達、確かに票を入れたけれども、ジュリエット役に江沼君を推薦したのは、城之内君ですしい」

野郎、後でみている。

そう思っただけ京一郎を見ると、にやにや笑いながら俺を見て言った。「文化祭の舞台なんざ、ただのお遊びよ。目くじら立てる程の事じゃねえだろ、委員長さんよ」

全く、京一郎は何を考えているんだ。実際やる俺の身にもなってみろ。

「委員長の整った顔立ちと俺との仲の良さは、周知の事実じゃねえか。お前がやるから俺もロミオをやってやるって。ほら決定。次、別の係や担当を決めてけよ」

確かに、公平な投票による多数決は多数決。このまま決定だ。

……俺、女装かよ。

放課後、俺は京一郎と夢乃、ほーりゅうと共に屋上に来た。

当然、今日のホームルームの件でだ。

「でもよ、『周囲の状況が激変する時は、その状況に完全に同化しつつ、自分を裏切らない仲間をそばに置く』って前に、お前が俺に言っただよな」

「そりゃ、言っただ事があるが」

先手を打つ感じで京一郎が言う。しかもこっちが忘れていような変な事をよく覚えていやがる。

「文化祭ってのは、充分非日常的なものじゃねえ？」

「……学生にとって、ただの学校行事だ」

「だが、ロミオとジュリエットなら、文化祭が終わるまで、一緒に行動を共にしてもおかしくないだろ？」

「……友人なら、劇をしなくても一緒に行動しておかしくないと思うが」

結局、京一郎は面白がっているだけじゃないか。

俺は、ため息をついた。

話が途切れ、俺と京一郎の会話が終わったようだったらしいほーりゅうが、急に俺に向かって言った。

「あのさ、今までジプシーに聞こう聞こうと思って、聞けなかった事があるんだけど」

チャプター・5 京一郎

「あのさ、今までジプシーに聞こう聞こうと思って、聞けなかった事があるんだけど」

ほーりゅうのその言葉に、俺は少々驚いた。この女に今まで、聞くに聞けなかったという、そんなつましい態度があったとは。

ジプシーも心外だったらしい。思わず皆で注目して、ほーりゅうの次の言葉を待つ。

「……前にジプシーが言っていた、私と同じ超能力を持つ知り合いて、誰？」

……ほーりゅう、こいつは遠慮をしていたんじゃない。絶対この話題を、今の今まで忘れていたんだ。俺はそう確信した。そして、ジプシーの方へ振り返ってみると、奴は露骨に嫌な顔をしていた。

普段、表面上の浅い付き合いの表情しか浮かべない奴を見慣れている俺は、ここまで、はつきり感情を顔に出している所を見たことがない。

なので俺は、この話題をそらすタイミングを、つい逃してしまっ

た。同時に、思った事をそのまま直に口に出せるほーりゅうが、ちょっとだけ羨ましく思った。あくまでもちよつとだけだ。

相手が話したがないとわかつている事を、俺は聞けねえよ。

何か考えがあつてか、夢乃も口を開かない。

さすがに、自分が何か言わなければ、この状況が終らないと思つたらしい。適当に誤魔化しても納得するまで、この女は繰り返して聞いてくる性格だと、これまでの経験でわかる。

ジプシーは嫌そうな顔をしたまま、気が進まない感じで答えた。

「一度だけしか会っていない。……我龍がりゅうと言う奴だ」

「どんな超能力を持つてる人？」

ジブシーはすぐに答えない。傍から見ていると、奴の心の内が良くわかる。如何に少ない言葉や文章で、このほーりゅうを納得させることが出来るかを考えているんだろ。……それだけ、我龍がりゅうって奴の事を話したくないって事か。

「……あれは、PK・サイコネシスか。能力の制御がきかないお前と違って、時間の溜めもなく正確でパワーもあった」

そう言った後、ジブシーの表情が、ふっと、いつもの無表情に戻る。

「なるほど……。前に、ほーりゅうの力を見た時、どこかで体験した感覚だと思ったのは、奴の能力と種類が同じだったからか」

それを聞いたほーりゅうが、思いついたように言った。

「能力もだけれど、私と名前も似てるよね、龍つながり！ 何か親戚関係ありそう？」

「奴の名前は下の名前だ。お前は苗字だろ。……母親違いで兄がいたはずだが、今の奴の親戚関係に十代の女はいない。あと、奴の背中には龍の刺青があると聞いた位だ」

龍の刺青？ 一般市民には縁のないものだ。一瞬、組や暴力団関係者かと思っただ、俺は口に出さない。

もついいだろうという感じで、切り上げようとする雰囲気きんきのジブシーに、ほーりゅうは更に聞いた。

「ジブシーと我龍、どんな関係なの？」

俺はジブシーの無表情の瞳の中に憎しみの光を見た。どんなにポーカーフェイスをしていても隠しきれない憎悪の色。

「それは、お前には関係のない事だ。話す必要はない。……生徒会室に書類を出してくる」

取り付く島もなく、身を翻してジブシーは扉を通り、屋上から出

て行つた。

追いかけようとしたほーりゅうの襟首を、夢乃が、むずと後ろからつかむ。

「夢乃、何すんのよ」

今まで黙つて成り行きを見ていた夢乃が、ほーりゅうと俺に無言のまま、その場に座るように合図する。

なので、ほーりゅうは不服そうにしながらも、その場でしゃがみこんだ。

「ほーりゅう、本当は私が話すべきではない事なんだろうけれどもこの調子なら、いつかはあなた、ジプシーの地雷を踏んじゃうわ。だから、私の知っている事を先に話しておこうと思うけれど。……まだ京一郎にも話していない事なんだけれども」

夢乃が俺を見る。

あのジプシーの顔をみたら、既に先程の会話で、充分奴の地雷を踏んでいそうなのだが。夢乃の今の言い方なら、他にも地雷はあるということか。聞ける時に聞いておくべきだろう。

「俺は今まで聞かなかったから奴の過去は知らねえが、その過去が今の奴を作つてんだろ。言葉で奴の過去を聞いた所で、現在の奴が変わらなかつたら、俺と奴との今の関係も変わらないさ」

頷いた夢乃は、何処から話そうかしばらく考えていた。

ほーりゅうも、ジプシーの後を追いかける事はすっかり忘れて、

夢乃の話を聞く気になつていようだ。

「もうジプシーには、いろいろ聞かないでね」

夢乃は、ほーりゅうに念を押してから話し始めた。

「ジプシーの両親が亡くなったのは、彼が小学校一年の最初の頃らしいわ。そして、私の家に来たのは、中学一年の春。だから小学校時代は、土居さんって言うんだけど、ジプシーの父親のお兄さんの所にいたそうよ」

「なんだ、てつきり天涯孤独だと思ってたけれど、親戚いるじゃない」

ほーりゅうは思わず言ったが、慌てて口を押さえて言った。

「……続きをどうぞ」

俺の中では、兄弟であるはずの土居という苗字が、ジプシーの苗字である江沼と違う事の方が引っかけたが、今回話の腰を折る程の事でもないだろう。まあ、父方というのであれば、陰陽師関係か。夢乃の話の続きを待つ。

「私の父と土居さんが、昔からの親友の関係で、ジプシーが私の家に来たんだけれども」

ちよつと夢乃は言い淀む。

「ジプシーの両親と妹さん、妹さんの年齢は彼の二つ下だったかな……事件があつて。ジプシーを残して、一家皆殺しにあつたらしいの。犯人は、まだ捕まっていない」

「……何、奴は一家皆殺しの目にあつた事件の生き残りで、犯人が捕まっていなくて？ そんな事件なら新聞の全国紙に載るだろ？ それに未解決なら、なおさら繰り返し話題にものぼる。一度も聞いた事ねえぞ」

俺も思わず声を出して言ったが、夢乃が首を横にふって答えた。

「その、土居さんって人がその土地の陰陽師の権力者にあたるのと、私の父も絡んでいるのかな……。報道が押さえられて地方の新聞にしか載らず、それもあまり大きな記事にもならなかったって。警察関係者以外にはジプシーの存在も知らされていないって」

そんな事が出来るのだろうか。……奴が生き残っているのがバレたらまずい事でもあつたのだろうか。または、さらに狙われる可能性などがあつたって事か。

そして、俺は今の話で一番気になった事を聞いた。

「まさか、その犯人って言うのが、例の我龍って奴じゃないだろうな」

「それはないと思う。我龍の年齢は私達と同じ位だそうだから、その当時なら六歳か七歳位でしょう。それに犯人は複数犯だって言われていたそうよ。私が直接話したのは土居さんの息子で、ジプシーの従兄弟になるわね。確か彼も私達と同じ学年で、勝虎かつとらって名前だった。ジプシーが初めて家に来た時に、土居さんと一緒にいて来ていたの。あの時は大人とジプシーだけが部屋で話をしていて、私と彼は別の部屋で待っていた」

大人同士の話と言うことで、別室で少しの間だが夢乃は勝虎と一緒に待っていた。こういう場面での顔合わせだったので、弾む内容は話題にしなかった。勝虎は根がいい奴らしく、ひたすら小学校時代と一緒に過ごした従兄弟の心配だけを口にしていた。

ただ、勝虎が言った台詞の中で、特に印象深いものがある。

『聡は事件のせいか、生き急ぐというか死に急ぐというか、今はそんな感じがするんだよ。そう、我龍って奴も会った時に同じ雰囲気でした。聡はあいつと会った日から変わったよ』

「って事は何だ、ジプシーは、その従兄弟と一緒に我龍と会ったのが、最初で最後の一回って事だな」

「私もその時は、我龍って人がジプシーの中で、そこまでの重要人物だとは思わなかったから、それ以上の詳しい話を聞かなかったんだけれども」

「その会った時に何かがあったとしたら、その従兄弟に聞けばいい事だが」

俺は夢乃の眼を見返して言った。

「俺達に、そこまで踏み込む権利はねえな」

夢乃の話は大体終わった。

なので俺は、今の話を頭の中で整理しつつ、ほーりゅうを見た。

案の定、怪訝な顔をして、俺に説明を求める眼をしていた。話の押さえ所がわかっていないのだろう。ほーりゅうには比喻などを使わず、直球で言う方がいい。

「つまりジプシーは、一家皆殺しにされた事件の生き残りで犯人は捕まっておらず、その犯人ではないし理由もわからないが、我龍という男を敵視しているって事」

無言で数回頷くほーりゅう。そこまでは解っているようなので続けていった。

「奴に、事件と我龍に関する事を連想させたり聞いたりするな。わかった？」

「……オッケー！」

ほーりゅうは両手で頭の上に輪を作る。この軽さ、本当に話の内容を理解をしたのか、俺はちょっと不安になった。

チャプター・7 ジブシー

俺は、生徒会室の前で立ち止まった。気分的に眼鏡をかけなおす。自分自身、今は精神が不安定になっている事位、気が付いている。ほーりゆうとの先程の会話のせいだ。しばらくドアの前で佇み、眼をつぶって、平常心が戻ってくるのを待つ。

……精神的にここまで動揺するのは久しぶりだ。単なる無邪気な質問だったのだろうか、やはり、あの女には警戒する必要がある。

いつもの調子が戻った感じがしたので、生徒会室のドアをノックする。「どうぞ」という、かすかな声が聞こえ、俺はドアを開けた。……しかし、まだ俺は本調子ではなかったらしい。ドアを開けると生徒会長が一人で机に向かつて書類を作成中だった。校内では最も二人きりで顔を合わせたくない相手。俺は、普段なら読める気配を感じ取る事が出来なかった。

仕方がない。

「あの、文化祭のクラスの出し物の詳細の書類、持ってきたのですが」

会長は顔を上げずに、持っていた鉛筆で壁際近くの机の上を指す。「その机の上の箱に、文化祭関係の書類は入れといてくれ」

俺は、できるだけ注意を引かないように、控え目に動いて箱に寄る。

……文化祭関係の書類は全部ここか。なら、ついでに後夜祭ライブ出場の為の書類も出しておくか。

会長に背を向け、持って来た書類を入れる。

このまま気付かれずに部屋を出たい所だが。

残念な事に、痛い程の視線を後ろから背中に感じた。俺だと気が付いたらしい。

校内の上に、ここ生徒会室は向こうのテリトリー。前回の事件の

事を、俺は徹底的にしらばつくれる気でいた。向こうが俺達の会話を立ち聞きた以外に証拠はない。この生徒会長の妹・足立真美は、俺との約束を守ってくれたらしく、前回の事件に俺の存在はないはずだ。最も彼女は俺を高校生だとは思わず、未だに警察の中の人間だと思っているだろうが。

近づいてくる気配がしたかと思うと、俺は後ろから肩を引かれた。振り返ると同時に胸倉をつかまれ、そのまま背中から壁に叩きつけられる。

「つつ！」

思っていた以上の力があり、思わず声が漏れる。

会長の鋭い視線が、顔を背けている俺の頬に突き刺さる。

「貴様、一体何者だ」

「何者って、ただの高校一年生です」

「嘘を言うな」

会長の、俺の胸元をつかんでいる両手に力がこもる。

「本当、僕には会長が何の事を言っているのか、わからないんですが」

俺のしらばつくれた態度に会長の怒りが頂点に達したか、そのまま膝蹴が鳩尾に入る。

「！！」

腹筋をしめてガードするものの、この近距離と角度や速度・的確な急所の位置でかなり効いた。膝が崩れかける所だが、壁に押し付けられている力の為に許されない。この空手有段者相手に白を切り通すのはきつそうだ。……一方的に、この会長相手に痛めつけられ、声は上げたくないと思っているのは俺のプライドか、などと関係のない事を、この状況で考えている。

そして、上段への攻撃にも備えて、俺は会長から目をそらさずに歯を食いしばる。

その時、生徒会室のドアが開いた。入ろうとした生徒会員らしき女生徒が、状況を見て小さな悲鳴をあげる。

一瞬、会長の力が緩んだ。その隙に俺は、会長の腕から滑り落ちる様に振り切って逃れる。

「！……待て！」

俺はドアで立ち尽くしている女生徒に心の中でお礼を言いながら、彼女の脇をすり抜けた。

チャプター・8 ほーりゅう

校内は、着々と文化祭の準備が進められている。

クラスとする舞台の「ロミオとジュリエット」も、ロミオもジュリエットも両方共男子がする事になっではいるが、意外とお笑いだけに留まらず、なかなかできえが良いい様子だ。普段の生活から演技しているような二人なんだから、演技がうまいのは当たり前か。

最も主役の一人のジュリエット役・委員長のジプシーは、練習はするが、当日本番直前まで衣装を着ないと頑張っている。サイズの確認をしたいんだけどなあと言う女子を頑なに拒み、うまく逃げ回っている。

そこまで、逃げなくていいのになあ。

傍観者の私は、楽しいんだけどなあ。

童顔で結構整った顔をしているから、ドレスが似合うと思うんだけどなあ。

私は今回、夢乃と衣装係に当たっている。今度の文化祭では使わないからと快く演劇部から衣装一式を貸してもらい、微妙な寸法調整やほつれを直す。最も、すぐに私は不器用だとクラスの女子にバシしたが、それでも無言で一生懸命、ちくちく針を動かしたりする。

今の私には考える事が一杯あったので、放課後に、この黙々とする作業が、とてもありがたかった。

考える事。もちろん、ジプシーの件。

私は、ジプシーの家族が事件にあって殺されたと聞いても、ぴんと来なかった。本人を目の前にしても、新聞の三面記事を読んでいる気分。私にはありがたいことに、物心ついてから亡くなった親戚や知り合いがないので。だから当事者が味わう、その悲しみはわからない。想像がつかない。私は想像がつかない事は考えない主義だ。だって、考えたって本当にわからないもん。

なので、考える事は、もう一つの事。我龍という人の事。

あれだけジプシーが嫌っていると聞かされたので、もうこれ以上は聞き出せないけれど、私と同じ超能力を持つているという人。

ジプシーと敵対しているなんて、怖い人なんだろうか。なんてったって、名前と同様に、背中に龍の彫り物をしている超能力者。ヤクザさんみたいにイカついのかも。

……超能力は持つていても制御不能な私に、能力の使い方を教えてくれちゃったり、しないだろうか。しないだろうなあ。でも、ひよっとして。なんて、都合のいい事も考えちゃう。

……ジプシーは嫌がるだろうけれど、私は我龍に会ってみたい。

そんな事をつらつらと考えている間に、文化祭の当日はやってきた。

クラスの舞台は十一時二十分から三十分間。集中して演じたり観たりするには、その位の長さの時間なのかな。私が出るわけではないけれど、舞台の前は、どうしても緊張するしバタバタするから、舞台が終わってから模擬店を満喫しようかな。なんて私は気楽に考えている。

そう言えば、ジプシーも京一郎も、申し込んでいた後夜祭のライブステージに出られるって言っていた。練習風景も全然見せてくれなくて、二人でこそそこそと相談しながら進めていた様子。楽しみは楽しみなんだけど、なんか私も夢乃も仲間はずれっぽいなあ。

そして九時を過ぎた。

既に周囲が賑やかになりつつある中、教室ではしつかり者の副委員長が夢乃が仕切って準備が進められる。

「皆、道具とか手順とか、最後のチェックをお願いね。あと、最後の衣装合わせの為に舞台に出る人、こっちに集まって」

それまで夢乃に全てを任せきりで、ぼんやりと窓の外を眺めていた委員長のジプシーは、はっとわれに返ったように振り向く。

「え？ 今？ ジュリエットの衣装を着るのか？ まだ早いだろ」

夢乃は、仕方がないと言う感じでジプシーの方を見た。

「委員長。あなたは遅い位の衣装合わせよ。今まで一度も試着していなかったんだもの。寸法が違っていたら、今直さないといけないでしょう？」

夢乃の言葉を受けて衣装係の女子が数人、ジプシーの方へ、にじり寄った。彼女達の表情が嬉しそうだ。実は皆、普段から近寄りがたかったジプシーと、ここぞとばかりに名目をつけて絡みたかったに違いない。

「うそだろ？」

あのジプシーが迫力負けして後ろに下がる。なんか不謹慎だけれど、私は見ているだけなので面白い。

なのに、ジプシーと女子の間に、京一郎が割って入った。

「ほら、のけよ。俺がこいつの着替えを手伝うから、他の連中は皆、教室から出る」

女子は一斉に京一郎にブーイングを浴びせるが、京一郎が怖いのか、こちらは少々迫力がない。

「楽しみは後にとっておけて言った。さっさと出て行け！」

京一郎に怒鳴られ、女子は全員悲鳴を上げながら逃げるように教室から出て行った。

それを笑って見ていた私も、京一郎に教室の外へ放り出された。

……減るもんじゃないし、別にいいじゃん。けち。

チャプター・9 京一郎

クラス全員を外へ放り出すと、教室に残ったのは、俺とジプシーの二人だ。

ほっとした様子で、ジプシーが言う。

「サンキュー、京ちゃん。助かった」

「まあ、そういうフォローをする為に、俺は一緒にいるつもりだったしな」

俺はそう言いながら、ハンガーにかけてあったジュリエットの衣装と、ご丁寧にも一緒に運ばれていた姿見をみる。

「で、さすがに覚悟を決めねえとな」

俺の言葉に、ジプシーは睨んで言った。

「誰のせいだ。誰の」

そして、しぶしぶとジュリエットの衣装を手取る。長袖の少々クラシックな型のドレス。そばには長い黒髪のかつらが置いてあった。

「ジュリエット、黒髪なのか？」

「……日本人が舞台をするから、わざわざ黒にしてんじゃない？」

「お前はロミオ役で地毛のままだから、いいよな」

文句を言いながらジプシーは眼鏡を外し、仕方なさそうに制服のボタンを外し始める。そして途中で、ふと衣装のそばの小物に気が付く。

「なんだ、これ」

「ペチコートって言うじゃないの？ ドレスの下に着るやつ。こっちは…… コルセットとか何とか言う矯正下着だと思うが」

「……絶対着ない」

「でもさあ、男がドレス着るなら、体形矯正しないといけないじゃねえの？」

「……胸もウエストもない女で、俺は結構」

そう言ってジプシーは、さっさと制服を脱ぎ終わる。いつも首から下げているロザリオが、動作に合わせて揺れた。そして、もう躊躇なくすぐに頭からドレスをかぶる。無駄な脂肪はもちろん、彼にとつて必要以上の余分な筋肉も付いていない身体が、一瞬にしてドレスに包まれる。そしてジプシーは、自分で襟元を整えながらつぶやいた。

「くそ。女の服のサイズが合いやがる。……もう少し身長が欲しいよなあ」

背中のチャックを上げてやりながら俺は、ジプシーから普通の高校生が言っような言葉を聞いた感じがして、ちよつと笑った。

そして、かつらに手を伸ばそうとしたので、俺が先に取り上げて言う。

「俺が整えてやるって。女の髪扱いには慣れてんだからさ。ほれ、眼をつぶってるよ。出来上がってからの楽しみだ」

ジプシーは、ちらつと俺を見てから背中を向け、眼をつぶった。

俺は、姿見を奴の前に持ってきてから、向きを合わせてかつらをかぶせる。そして、長い髪の後ろの毛先から少しずつ櫛を入れていった。

ジプシーはおとなしく待つ。これが俺の姉貴だったら、やってもらっているくせに、痛いだの手際が悪いだの、文句たらたら言う所だ。

髪全体に櫛が通り、ゆるくウェーブがかかる髪のバランスを整えてから、俺は鏡越しにジプシーを見た。そして口笛を吹きたい衝動に駆られる。クラスの女子連中の目に狂いはなかった。

……こいつは美人だ。いや、美人というか可愛らしい・愛らしいというべきだな。男にしておくのはもったいない。道具があれば、口紅をつけてやりたい所だ。

「ほら、出来たぞ」

俺の言葉で、ジプシーは目をあける。そして、鏡の中の自分の姿を確認した。

無言で鏡の中の自分を見つめるジプシーに、俺は見惚れているのかと茶化して言ってやろうかと思った。だが、いつもの奴と様子が違う事に気がつく。普段から見せる無表情じゃない。鏡の中の、さらに遠くの何かを見ている。

「どうした……」

俺はジプシーの肩に手をかけて、振り向かせようとしたが、奴の言葉に思わず止まった。

「こんな感じなんだろうな。妹が生きていたら。俺も妹も母親似だった」

俺は、かける言葉が見つからず、鏡越しにジプシーを見つめ返した。

「聞いたんだろ、俺の家族の事は。夢乃から」

確かに聞いたが、俺は態度に出たのだろうか。

俺の表情に気がついたのか、鏡の中の自分の姿を見つめ続けたまま、ジプシーは消え入りそんな微笑を浮かべた。

「お前も夢乃も、俺に対する態度は変わらない。……そう思ったのは、ほーりゆうが明らかに俺に気を使っているから」

……あの直球女に、話を聞いた後も変わらない態度をとれなどと言つ、そんな器用な芸当ができる訳がなかった。俺は黙つて、鏡の中のジプシーの顔を見つめた。奴は俺じゃなく、その背後の遠くを見ているようだ。

「トラが……俺の従兄弟の勝虎が、佐伯の娘に俺の事をすっかり頼んでおいたって言うていたから、夢乃はトラから大体の事を聞いていたんだろうと思つていた。でも俺は、夢乃が多分考えている程、事件自体に対しての思いはない。……言い方が違うな。両親と妹が誰かに殺された、その場面が記憶から抜けているんだ。事件直後は覚えていたと思う。生き残りの俺は、警察でかなり事情聴取されたはずだから。ただ、今、思い出そうとしても、事件の当日からその後半年間の記憶がはつきりとしない。……きっと、これから生きていく為の記憶喪失なんだな」

普段にはない饒舌で、奴の精神状態が心配になってきた。俺の表情で奴にも伝わったらしい。

ジプシーは、舞台のジュリエットの衣装のドレスの裾をつまんで言った。

「大丈夫だ。この格好で、少し感傷的になっただけだ」

そして、振り返って奴は直接俺の瞳を見る。いつもの見慣れた奴

の顔だ。そして、何かが吹っ切れた感じもする不敵な笑みさえ浮かべて見せながら、左手で拳を作り、俺の胸を軽く叩いて言った。

「悪い。誰かに話したい気分になったが、心配性の夢乃には言い辛い事だった。今聞いた事は忘れる」

……忘れるって、記憶喪失になる訳にも行かないのに簡単に忘れられるか。と言うことは、お前の中で引っかかっている事は、やはり我龍という名の男の事だけなのか。それとも、俺達に気を使っているのか。

とりあえず、俺は言った。

「まあ、何だな、その格好の間、お前は鏡を見るなって事だな」

その時、教室の入り口で気配を感じた。ジプシーもドアには背を向けていたが、気配に気がついたようだ。

俺は、ジプシーに動くなど合図をしてドアへ目を凝らして見ると、ゆっくりと隙間が細く開いて、いくつかの目が覗いた。ジプシーの着替えを待っていたクラスの女子達だ。どうやら時間がかかり過ぎたようで、待ちきれなくなったらしい。

着替え終わったらしいジプシーの後姿を確認した途端、教室のドアが勢いよく開かれた。そして数人の女子がなだれ込んできた。

最初に入ってきた女子の手にはカメラまである。

一人が声をかけてきた。

「ジプシー……委員長、サイズはどお？」

「ちょうどいいみたいだつてさ」

固まっている奴の代わりに、俺が答える。

「やっぱり！ 似合うと思っていたんだあ！」

「とっても可愛いー！ 今の間に写真撮ろおよ」

「ほんとに女の子みたい！」

「触っていい？」

「ポーズとって！」

女子に見られたせいでますます固まるジプシーを取り囲み、口々

に賞賛の声が上がる。その勢いと雰囲気には俺は思わず下がる。下がった為か、その時何気ない女子の動きが、ふと眼に入った。まるまる奴を取り囲んでいる訳じゃないんだな。まるで逃げ道をワザと作っている様な……。

カメラのフラッシュが光った瞬間、声が重なる。

「委員長、恥ずかしいからって逃げないでよお」

その声が引き金のように、女子の気迫に負けたかジプシーが後ずさりする。そして、女子に押されるように、教室のドアを抜けて逃げ出した。

それを待つていたかのように、女子が歓声を上げて追いかける。その中に、嬉しそうなほーりゅうも混ざっていた。

……はっと気が付く。普通に考えたら、これってもしかして、まづいのでは？

俺も慌てて、後を追おうとしたが、俺の前を夢乃がさえぎった。

「退け、夢乃！ 女子の雰囲気と行動が変だ！」

夢乃は、くすくす笑って言った。

「大丈夫。廊下で待つている間に、女の子の中で話が出来たのよ」
訝しげに夢乃を見た俺に、続けて言った。

「だって、せっかく舞台をするなら、沢山の人に観てもらいたいじゃない。だから、ジュリエットの姿のジプシーを校内で走らせて宣伝しようって。……いいじゃない、学校の中では裏の任務も仕事もないんだから。ジプシーも普通の高校生活を楽しめばいいのよ」

成る程、事情はわかった。女子の邪気のない作戦で、多分やつぱり精神が不安定だった奴が、まんまと引かかったのもわかった。だが。

……この女ども、鬼だ。

チャプター・11 ほーりゅう

文化祭。既にいろんな所で催しが始まっている中、私は校内の廊下をクラスの他の女子と一緒にジプシーを追いかけながら、夢乃の言葉を思い出す。

<舞台の宣伝なんだから。ジプシーに追いつかないように追いかけて回すのよ。学校中の特に女子に彼の女装姿を見せて、興味を持ってもらうのよ。絶対捕まえず見失わず、とことん追い回すのよ！>

夢乃って意外と鬼のような性格なんだなあと思いながら、言われた通りに追いかける。幸い、ジプシーは着慣れないジユリエットの衣装を着ているので、とつても走りにくそうだ。どうにか見失わずに行けそう。

こんな簡単な計画に引っかかるなんて、ジプシーって案外ドジなんだなあ。

つい笑いそうになりながら廊下を走っていると、急に後ろから、今すれ違った人に腕をつかまれた。

思わず振り返る。

最初に眼に入ったのは、私の腕をつかんでいるその人の、背中の半ばまである髪を一つに編んでいる三つ編み。だが、顔を見上げると、面白いモノを見たと言った感じで笑っている眼をした男の子だった。

「今の彼、君のクラスの男子？」

声もちゃんと男の子だ。同じ年位かな？ 私服だから、この高校の生徒じゃなさそう。

「そうよ。十一時過ぎから講堂の舞台で劇をするの。観に来てよ」その男の子は更に笑いつつ言った。

「今の彼に伝えてよ。俺が今まで会った女性の中で、君は二番目に

綺麗だった」

私もつられて笑いながら聞いた。

「あんたの出会った中で、一番綺麗な人って誰？」

男の子は、ちよつと私に近づいて耳元で答えた。

「もちろん、俺の母親さ」

笑いながらそう言うと、男の子は片手を振りつつ背中を向けて離れていった。

私は、何だかとても楽しくなった。なので笑いながら逆方向に、見失ったジプシーを探しに走って行った。

うん。いろんな出来事があつて、文化祭は何か楽しいな。

その時、校内放送が聞こえた。

『一年の佐伯夢乃さん。職員室まで来てください』

夢乃が呼ばれた。なんか用事なのかな？ 委員長のジプシーがこんな状態だから、副委員長は用事が増えるよね。

なんて思いつつ、さて、ジプシーはどっちに行ったのかなと考える。

……なんだ、結局私一人だけ、まかれちゃったよ。

夢乃は職員室に入って行った。校内放送用の機械が置いてある場所に近づく。夢乃を放送で呼び出した女性教師が気が付いた。

「あ、佐伯さん。今、おうちから電話が入っているのよ」

「ありがとうございます」

夢乃は教師に礼を言つて、電話の受話器をとる。

「夢乃です。……お父さん」

警視庁に籍を置く父親からだった。そして、話を聞く夢乃の表情が強張る。

それと同時に、職員室の片隅に置かれていたFAXが受信を始めた。

夢乃は、電話の途中で先程の教師を振り返って言った。

「先生、急ぎの用があるので、私が校内放送で呼び出しをして構いませんか？」

教師が頷くのを確認してから、夢乃は電話に向かう。

「お父さん、今呼ぶから、このまま保留をお願い」

夢乃は校内放送のマイクの電源を入れる。

『一年の江沼聡君、至急職員室まで来てください』

数分後、職員室の前からざわめきが聞こえた。職員室の皆が何事かとドアの方へ注目する。そこへ、一人の少女が姿を現した。

クラシッくなドレスに身を包んだ、ロングヘアーの可愛い女の子。その可愛さに思わず周囲から感嘆の声まで上がった。その少女の瞳が探し物をするように職員室の中を見回す。

はっと一人の学年主任が気が付いた。

「お前、一年の江沼か！　なんて格好をしておる！」

その言葉に、職員室とドアの付近にいた者が更にざわめく。

夢乃を確認し、職員室の中へ進みながら、ジプシーはアルトの声で言った。

「すみません。舞台の衣装合わせの途中で、至急と言われたものですから」

夢乃のそばまで来ると、彼女の表情に気が付いたようにジプシーの表情が一変する。事態を把握したらしい。

「お父さんから電話が入っているわ」

頷いてジプシーは受話器をとる。

「代わりました」

その間に夢乃は教師に聞いて、届いているであろうFAXを受け取りに行った。

チャプター・12 京一郎

俺は一階の職員室に向かって走った。文化祭と言う事で人が多いから走りにくいけど、今日は廊下を走っても咎める先生は見当たらない。

階段を駆け降りようとした所で、ほーりゅうと合流した。

「京一郎、今の放送聞いた？」

「だから急いでいる。夢乃の呼び出しに続いて、夢乃の声でジプシーも呼び出した。何かあったんだ」

階段を降りてから、二人で渡り廊下を走って職員室棟へ向かう。

「そう言えば、お前、ジプシーを追いかけていなかったか。奴はどうした。もう職員室に行ったのか？」

「……私が放送を聞く前にまかれた」

「ドジ」

まあ、職員室に行けば奴と会うだろうと思い、俺は職員室のドアの所へたどり着いた。後ろでぜいはあ言っているほーりゅうを放つとして、俺は職員室の中をのぞく。

ジプシーと夢乃が職員室の奥にいた。まだジプシーはジュリエットの舞台衣装のままだ。まあ、放送のタイミングを考えると、着替える時間が無かったから当然か。

「……江沼！」

俺の声が聞こえたのだろう。手元の紙を見ながら職員室の電話を使っていたジプシーが、顔を上げて一瞬俺を確認する。そして、俺に向かって言った。

「独鈷三本、上へ」

そのまま電話に戻る。

俺は瞬時に了解した。

身を翻して職寝室を後にしようとした俺に、ほーりゅうがまた、走ってついてこようとする。

「お前は夢乃の所にいる。後で必ず合流するから」

走るのが遅いほーりゅうを連れ回したくない。俺は彼女を振り切って走る。追いつけないとわかったら、諦めて夢乃と一緒にいるだろう。

俺は渡り廊下を抜け、校舎の出入り口の方面へ向かった。走りながら考える。独鉗は本来、護摩の時のみに使う物だと奴から聞いたが、正規の陰陽師として継承していない異端なジプシーは、精神集中と術発動の媒体としてこれを使っているはずだ。

生徒の靴箱兼ロッカーが並ぶ場所に着き、俺は普段から預かっているジプシーの合鍵を出す。

「あいつ、独鉗って言ったよな」

俺は奴の持っている法具の中から、鉗が一つの二十二センチの物を選ぶ。奴の独鉗は独鉗杵武術でも使えるようにと鉄製だが、今までに体術でこれを使っている姿は見た事はない。

校内で、これを使わなければならない何かが起こったか？

俺がいつもの場所の屋上に着くと、ほーりゅうが手招きをして叫んだ。

「京一郎、遅いつ！」

いつもなら「悪いね」とか言いながら合流する所だが、先に言われると言いにくい。

ジプシーは片膝をついて、黒板に使うチョークで小さな陣を描いている。俺は近づいて行き、そばで見ている夢乃に並ぶ。

以前にも見た事がある。

これは確か、式神召喚の陣だ。

夢乃が俺に、一枚のFAX用紙を渡してきた。これは、さっきジプシーが電話口で見ていた紙だ。紙には二人の男の顔写真が載っていた。

一人は、目元が神経質そうな細身の男。もう一人は、大柄な感じのする太い首から肩口にかけて筋肉質的な男。どちらも人相は宜し

くない。

「現在指名手配中の強盗犯二人組」

夢乃が俺に説明する。

だろうな。そんな感じの関わりたくないタイプの男達だ。

「今朝、潜伏先を発見して踏み込んだら逃げた後だったって。特に拳銃とかは持っていないらしいけれども。逃げた先が偶然にも、この高校の敷地内の可能性があるって連絡があつたの」

「……それって、やばくねえ？ 今日ほただでさえ文化祭で人が増えてんじゃん。さつさと警察が入って探す……って訳にはいかないか。パニックになる上に本当に逃げ込んでいたら、警察を見た途端に人質をとって暴れそうだな」

「それに、さつき職員室で確認したら、文化祭開催の挨拶の後、校長先生は用事で出かけて、連絡が取れるのは十一時を回るそうよ」
「そして」

書き終わったジプシーが立ち上がり、夢乃から写真の紙を受け取る。陣の真ん中に置き、その上へ独鈷を配しながら言った。

「警察と学校の協定か何か知らないが、学校側の責任者の承諾がなければ、確か警察は学校の敷地内に勝手に入る事が出来ない」

……それが本当なら、相当やばい。

ジプシーは両手で印契を結んで言った。

「今から学校の校内に連中がいるかどうかをみる。いなけりや夢乃の親父さんに連絡だけ。……もし、いたら、校外へ連中を追い出す」

目の前の、式神召喚の陣。

その前で両膝をつき、両手で印契を結んで真言を唱えている、クラシックな衣装に身を包んだ黒髪の可愛らしい美少女、に化けている男。

……変な絵。

なんて考えている場合じゃない。俺には、もう一つ気になる事があった。

俺も夢乃も、そちら方面の能力が全くない為に、ジプシーの召喚する式神は見えない。

しかし、超能力を持っているというほーりゅうには、果たしてジヤル違いのそれが見えるのだろうか。

皆で陣を見つめているその時、ジプシーの目線が陣からはずれ、すっと上を向いた。

夢乃が、ジプシーの動作に気が付いて、見えてはいないのだろうが同じように上を向く。

だが、ほーりゅうはワクワクした表情で、まだ陣を見つめていた……こいつも式神は見えていないんだ。残念なような、同類で嬉しいような。

眼で式神を追っていたらしいジプシーが、立ち上がった。

「向かいの職員室棟、四階の理科室前」

独鈷を一つ掴んで、ジプシーは屋上から階段へ続く扉へ向かって走りだした。

「くそっ！ マジで強盗犯がいたのか！」

俺も夢乃も、一つずつ独鈷を掴み、奴の後を追って走り出す。

「あゝ！ 私だけ、何か名前知らないけれどソレがないゝ！」

ゲーム中に一つ足りない物を取り損ねた様な事を言いつつ、ほー

りゆうは仕方なくFAX用紙を拾って走り出した。

階段を駆け降りながら、夢乃が言う。

「理科室って、もしかして強盗犯は持ち出し禁止の薬品狙い？」

「理科室は偶然かもしれないが。文化祭で生徒棟と講堂と運動場は今、一般客も溢れている。開放していない職員室棟の上の階は、そういう意味では人がいない」

四階には渡り廊下がない校舎構造なので、三階まで降りて渡り廊下を走る。

その途中で俺はスピードをあげ、夢乃を引き離して走り、裾の長いドレスで走りにくそうなジプシーに追いつく。

「……四階へ続く階段上がった直後に一人」

ジプシーが言う。FAXで送られて来ていた、二人の男の顔写真を思い出す。

直感。多分待ち構えているのは、筋肉質の男の方だ。なら、こちらに分があるのは、力よりもスピード。

俺は動きにくいジプシーより先に階段を駆け上がる。

四階に着く直前、曲がり角で待ち構えていたらしい男が姿を現し、上から俺に飛びかかって来た。

聞いていたお陰で俺は予定通り、階段途中で一瞬左へ身体をかわし、男の腹に思い切り右足を振って蹴り上げる。相手は俺の動きを予測をしていなかったのだろう。綺麗に振蹴が決まり、男の体勢がバランスを崩して低くなる。俺はそのまま駆け上がりつつ、すれ違いざま、後ろから体重をかけて右の腕刀を延髄に叩きつける。

男は前のめりにふらついた。そこへジプシーが追いつく。

ジプシーは右手を差し出し、前のめりになっていた男の右手を握手するかのように握る。そのまま身体を反転させて握手の下を左下からくぐり、男を階段下へ投げ飛ばした。仰向けに倒れる男の鳩尾に、間髪入れず飛び降りたジプシーの片膝が食い込む。

俺の勢いに任せた攻撃に加えて、ジプシーの基本忠実で正確な技が決まる。予想通りだった筋肉質の方の男は、間違いなく意識不明だ。やり過ぎの感があったが、何と言っても相手は強盗犯。確実に倒す為だ。仕方がない。

俺とジプシーはお互いに、無言で親指を立ててOKの合図を交わす。

ほーりゅうと夢乃が追いついた。

「何？ もう終っちゃった？ この人、泡吹いてんじゃん。大丈夫なの？」

残念そうに言うほーりゅうの口を、夢乃が慌てて押さえる。

そつだ。もう一人いる。多分この筋肉男より頭の回りそうなく、ずる賢いイメージの男。

今度は、全員でゆっくりと足音を立てないように、階段を上がる。階段を上りきった所でジプシーが、曲がり角から顔を出して、廊下と片側に並ぶ教室の様子をみた。

「……気配が無い」

「今の間に逃げたか？ 式神は？」

「……廊下向こうの突き当たりに、上着が落ちている。……何かしらのトラップかな。式神はその上に乗っている……俺を確認して、今消えた」

俺も覗くが、当然式神は見えず、遠くの方で落ちている服だけが見えた。

廊下の片側は全て外に向かった窓。開いたりしまったりしているが、特に何か仕掛けられている様子はない。

埒が明かないと思ったか、ジプシーがゆっくりと廊下へ踏み出した。

俺は、開きっぱなしのドアから、一番近い教室の中を覗きながら夢乃に言う。

「お前ら二人はここで待っている。絶対に動くなよ」

俺は夢乃が頷くのを確認してから教室の中へ、気配を確認しつつ
忍び込んだ。

チャプター・14 ジブシー

文化祭で賑やかな校内のはずだが、使用されていない建物の四階までは声が届かず、静かだった。神経を集中させながら、廊下をゆつくりと進む。着替える時間が無かったので、未だに俺はジュリエットの衣装の格好のままだ。動きにくい事この上ない。

この階には俺と、教室を調べる京一郎、階段を上がりきった見えない所で夢乃とほーりゅうがいる。だが、その他の人の気配が全くない。息を潜めて隠れるのがよほど上手いのか、あるいは、先の廊下に衣服をワザと残して警戒させている間に逃げたのか。

廊下の中程まで来た時、一度止まる。やはり気配がしない。教室の中にいる京一郎を見る。彼も無言で首を横に振る。この先か、逃げたか。

この職員室棟の大きさなら、俺の結界で包み込めない事もない。男の位置確認は、その方が手っ取り早い。

そう考えた時、ほーりゅうが動いた。

てくてくと、俺の後から付いてきた。あまりにも普通の動作だったので、夢乃が止め損ねた。

俺の集中が、乱れ途切れる。

「おまえ、動くなと」

「ここまで強盗犯がいないんでしょう？　なら後ついてっても大丈夫なんじゃ……」

そう言った途端、外に向かって開いている窓から手が伸びてきた。すばやい動作でほーりゅうを後ろから羽交い絞めにし、同時に首筋でナイフが光った。

……やられた。

奴がいたのは、四階でも窓の外だ。

飛びかかるには距離がある。

ほーりゆうにナイフを当てたまま、男はゆつくりと窓を乗り越えて入ってきた。

「高校生のガキ共か」

人質をとった事で余裕があるのか、男は笑いながら言った。そして、ほーりゆうの持つているFAX用紙に気が付く。

「だが、ただのガキじゃないな。警察からのFAX持参か。どうやらさつき、俺の仲間をやってくれたようだしな」

男は、俺を見据えて言った。

「この中では、レトロな格好のお嬢様がリーダーだな。目つきでわかる。……階段の所にいる女、それと教室の中にいる茶髪、お前らも動くな」

状況上、向こうの方が有利だ。全員言われた通り、動きが止まる。だが俺は、この状況においての違和感を感じた。

状況の違和感……ほーりゆうの超能力の出る気配がない。

この状況なら、ほーりゆうの制御不能とは言え超能力が出るんじゃないのか？ 彼女自身も切羽詰ると出ると言っていたはずだ。俺は、まだ一度しか見たことが無い彼女の能力を思い出す。京一郎の時の話も思い出してみる。

……ほーりゆうの超能力の媒体・増幅をしているであろう、彼女の持つているロザリオの中の石！ 意思を持つと言われるあの力デニアと呼ばれる石がこの状況を、超能力不要と判断しているのか？

「ゆつくりと手をあげろ。余計な事をするなよ」

目の前にいる男が、ほーりゆうの首筋にナイフを当てたまま、俺から視線を逸らさず言う。俺は言われた通りに、手の平を男に向けて、両手をあげた。

……そうか、似たような状況でも前回とは違う事がある。殺意の方向だ。

ほーりゅうの、自分に向けられる殺意が能力の発動条件なら、このままでは出ない。今、ナイフが突きつけられていても、それはそこにあるだけであって、男の殺意は俺に向いているからだ。俺や京一郎の時は、どちらもその時点では、殺気として、ほーりゅうに向いていた。

あるいは、俺が彼女を助けると言う可能性が、超能力発動の妨げになっているのだろうか？

俺は頭の中で、この場を切り抜ける、いろいろなパターンを思い巡らしシミュレーションする。そして、彼女の能力が発動するかどうかを確かめつつ、こちら有利の状況に持っていく為の、一つの方法を選んだ。

「……ほーりゅう」

俺の声に、多少の怯えを見せつつ、ほーりゅうが俺を見た。

俺は、今現在の立ち位置を確認する。廊下に俺と、男とほーりゅうを挟んで反対側に、夢乃。教室の中に京一郎。少し窓際に俺が動けば、俺と夢乃と京一郎を頂点とする三角形の中にぎりぎり、男はいる。

男の気をひかないように、本当にゆっくりと、俺は移動しながら両手を下げる。

そして、左手の袖口から手の平へ、独鈷を滑り落としながら言った。

「ほーりゅう、お前は俺の仲間になると言った時に、自分の身は自分で守ると言ったよな」

ほーりゅうは、大きな眼をさらに大きくして俺を凝視した。

チャプター・15 ほーりゅう

まず、男に捕まった時に思ったのは、『やばい！ ミスった！

ジプシーに怒られる』だった。

突き付けられたナイフが目に入っても、私を捕まえている男のしている先は常にジプシーだったから、そうパニックになるほど恐怖感がない。後でジプシーに怒られる方が怖い位。噛み付いて逃げ出そうかとも思っただけで失敗も嫌だし、また余計な事をと、更に怒られるかもしれない。

なので大人しく、されるがままに人質になっていた。

小さい頃からの経験上、この状態のままでは私の中に危機感がそんないないので、私の超能力と呼べるものは、なかなか出てこないだろう。

うーん、困った。

……ジプシー、助けてくれないかな。

京一郎も夢乃も、助けてくれ……る状況じゃないな。

しかし、こうやって真正面からじっくり見ると、ジプシーって女装が似合うなあ。舞台のジュリエット役、選んで当たりだったなあ。いやいや、この状況でこんな事を考えているだなんてバレたら、後々なんて言われるか。自重、自重。

その時、ジプシーが私に向かって言った。

「……ほーりゅう」

やばい。今の状況で違う事を考えていたとバレたら大変だ。慌ててジプシーを見る。

いつもの無表情に、恐ろしい程の冷たい眼。……絶対怒ってる！ジプシーは、あげていた両手をゆっくりと下ろして、続けた。言っ

「ほーりゅう、お前は俺の仲間になると言った時に、自分の身は自分で守ると言ったよな」

……言った。そう言わないと、あの場では、取り合えず仲間には潜り込めないかもって思ったもん。実際、自分自身も守れるかなあとは思ったし。今のこの状況でも出てこない制御不能な超能力でもさ。

「何をごちゃごちゃ言っている。そのドレスのお嬢様、手を勝手に下ろすんじゃない！ この女は脱出までの人質としてこのまま連れていく。お前らはそのまま動くなよ」

私を捕まえている男はそう言って、ジプシーを睨みつけながら、廊下を少しずつ移動し始めた。

その様子を見つつ、ゆっくりジプシーが両手の平を組む。

……拝むの？

なんてバカな事を考えたら。

「オン」

何？ まさか？

私は、続けて真言を唱えるジプシーを、啞然と見続ける。

瞬間、ジプシーと夢乃、京一郎の三箇所空間がゆがむのが見えた。同時に、三人の持っている何かの振動する音が響く。……あれ、屋上で私が貰い損ねたヤツだ。

なんて思ったら。

「きゃあああつ！」

思わず叫ぶ。痛い！

足元から膨大な電流が身体を突き抜けた！

「うわあああつ！」

私を捕まえていた男も、同じような目に合っているらしい。

私を突き飛ばして電流から逃れようとする。

「いやあああ！」

よろめいて膝を付く。なおも続く電流の感覚で、私の中の何かが振り切った！

ドオンンン！！！！

爆発音と共に、座り込んだ私の周りで、爆風が吹き荒れた。もちろん、制御なんてきかない。パンツ！　パンツ！　といくつかガラスの割れる音も同時に響く。

……一瞬の出来事。

身体に通る電流の感覚がなくなり、床に両手をついて顔を上げる。そして私が見たものは、台風が通り過ぎたような廊下の開いた窓から爆風に煽られた男が飛び出し、四階から落ちていくところだった。

私は動けなかった。

私の、超能力が出る瞬間に隠れた夢乃、教室内で頭を抱えて伏せた京一郎、姿勢を低くして爆風を避けつつも私から視線を外さなかったジプシー。

すぐに、吹き飛ばされた男に気付いたジプシーが窓に駆け寄ろうとしたが、さすがに血相を変えて猛然と階下へ続く階段へと走り出す。その様子に気が付いた京一郎も、教室から飛び出して後を追いかけた。男が落ちる瞬間を見ていなかった夢乃が、私の方へ駆けて来る。

私は座り込んだまま、それらを呆然と見ていた。

チャプター・16 ほーりゅう

私は半泣きになりながらも、夢乃と一緒に階段を降りていった。先に走り出していたジプシーと京一郎は、とつくに姿が見えない。もう今頃、男が落ちた場所へ着いているんだろうか。

直接手を出していないとはいえ、私は人を、四階の窓から落としてしまった。

一階に着き、校舎から出る。隣の生徒棟では、文化祭の賑やかさが伝わってきたが、その反対側へ回り、窓の下になる所へ向かう。角を曲がる時、さすがに足が止まった。

この先にあるスプラッタ光景がまざまざと目に浮かぶ……。

「あゝん！ 私のせいじゃないもん！ ジプシーのばか！」

思わずそう叫びながら、私は夢乃と、角を曲がって現場に走り出した。

だが、その異様な光景に、思わず私も夢乃も再び立ち止まった。先に着いていたジプシーも京一郎も、身動きせずに無言でそれを見ている。

四階から地上へ叩きつけられたと思われた男が、倒れているように見える。

倒れているように見えるが……浮いていた。

男の身体全体が十センチ程、地面から浮いていた。

無言で見つめている私達の目の前で、そして急にどさつと下まで落ちた。

落ちると同時に、ジプシーが駆け寄った。すばやく首の脈や外

傷を調べる。

「……意識を失っているだけだな。傷もないし命に別状はない」
私も夢乃も、ほっとした。人を殺さずに済んだんだ。私は脱力して、その場にへたり込んだ。ジプシーも心底安堵したような表情を浮かべる。

「……確かに宙に浮いていたよな。これも、お前がやったの？」

京一郎が私に言った。もちろん、私は顔をぶんぶん横に振った。

「こんな器用なマネ、出来る訳ない」

「偶然の産物か」

ジプシーが何か考えながら言う。

「そう言えばお前、後から何か叫びながら来なかったか？ 誰々がバカあとかさあ」

京一郎も、軽口が叩ける余裕が出たようだ。

その言葉が聞こえていたらしいジプシーが、ちらっと私を見た。

……後で、いろいろと締め上げる気？ ……逃げてやる。

「まあ、とりあえず結果オーライ？ ……こいつは意識を取り戻しても、多分お前の事をずっと女だと思っているだろうなあ」

ジプシーに向かって、笑いながら京一郎が言った。

「あ？ ああ」

まだ何かを考えつつも、ジプシーは夢乃に指示を出す。

「夢乃、いつもの刑事が門の前まで来ているはずだ。連絡をとってくれ」

さつきからジプシーって何を考えているんだろ？ やっぱ私の締め上げ方法か？ まさかね。

夢乃が駆けて行くのを見ながら、私はもう一つ気になる事があって、周りを見渡した。

でも、皆には言わない。この場では何だか、言っちゃいけない気がする。

……さつきまで確かに感じたんだけど。会った事がないはずの、我龍の存在。

屋上で、二つの人影が動いた。

柵に寄りかかるようにしてこの様子を眺めていた長身の青年が、
やわらかい口調で微笑みながら言う。

「助けましたね」

もう一人は、下の様子を気にするそぶりを見せずに、ジプシーの
チヨークで描いた模様を何となく靴の爪先で消している。

「今までの流れからみると、あの状況での爆発的な力は彼女ですが、
あの男の落下を止めたのは貴方ですね。我龍」

我龍と呼ばれた男は答えない。

「彼女は力の制御が出来ていない様子ですが、同じような能力を持
つ者として、興味があるんじゃないですか？」

「制御できない力は俺には問題外。夏樹、貴様は喋り過ぎだ」

我龍はそう言って、もう興味が失せたかのように夏樹に背を向け
た。

「そうそう、パンフレットにもありますよ。お知り合いの舞台、観
て行きますか」

ちよつと振り返り、我龍は冷ややかな眼つきで夏樹を一瞥する。

「奴の舞台を観る？ この俺に笑い死ねって？ はっ！ 笑止」

あつさり言い捨てると、我龍は屋上から空中に身を躍らせた。

恐らく彼ならではのPKで、猫の様に軽やかに地上へ降り立った
事であろう。

やれやれという感じで、夏樹は微笑んだ。

「あいにく私は貴方と違って、普通の人間なんです。……舞台を
観ずに何の用でここまで来たんだか。まあ折角だから、私は舞台を
鑑賞させて頂こうかな。貴方が観たいと思った時に、私の記憶から
接触テレパシーで観る事が出来る様に……」

眼下で、こっそりと入ってきた私服の警察官らしき数人が男を運
んで行くのを確認した夏樹は一人、ゆっくりと階段の方へ歩いてい
った。

チャプター・17・京一郎

「何処に行っていたのよ！ 主役の二人共！」

相当やきもきしていたであろうクラスの皆に呼ばれながら、俺達四人は控え室になる教室へと走って戻って来た。時間にして十一時ジャスト。「ロミオとジュリエット」の舞台の幕が上がるまで後二十分。

お昼前のこの時が、この文化祭一日の中で一番活気が溢れている時間だと思う。その人ごみを蹴散らして、一応急いで帰ってきたのだが。

「悪い悪い、放送で職員室へ呼ばれたの、知ってんだろ？」

「呼ばれたのは、かなり前に委員長と副委員長の二人でしょ！ もう！ 本当に間に合うか心配したんだから。すぐ移動よ」

確かに時間がない。俺達は今日の通し練習なしのぶっつけ本番で、講堂の舞台に出る事になる。だが俺もジプシーも台詞は完璧に入っているし、大丈夫だろう。

ジプシーは先に着替えていたので、今度は女子に捕まって口紅をつけられている。まあ、舞台に立つんだ。化粧は仕方がないだろうと、俺も急いで着替えた。面白い事は基本的に好きだから、俺は舞台衣装に着替える事に何の抵抗感もない。役も男のままだし。

照れの為か、むっつり不機嫌そうな男のジュリエット。

うまく行くのか、この舞台。やっぱりお笑い路線か？

舞台の袖で、俺達は前のプログラムが終るのを待っていた。袖から僅かに見える観客席を伺う。舞台の上は結構ライトで明るい。対照的に客席は顔の区別がつかない位に薄暗い。これなら緊張せずに演技が出来そうだ。そばのジプシーに小声で言ってみる。

「なあ、ジプシー。アドリブでラブシーン入れるか？ 濃厚なのをさ」

「……冗談。これ以上クラス的女子を喜ばせる気はない」

「とにかく、今回は恥ずかしがらずに役になりきった方が、絶対いいって。中途半端が一番目立つ。どう見ても今のお前って、女にしか見えねえし」

俺の言葉を聞いているのかいないのか、無表情のジプシーは答えない。なので。

「さあ、マヤ！ 役になりきるのよ。舞台の上では貴方は江沼聡ではなく、ジュリエット」

言い終わらない内に、後ろから奴に思い切り頭を殴られた。

アナウンスが、前のプログラムの終わりを告げる。

大丈夫だ。俺も奴も緊張していない。

講堂は立ち見が出るほどの満員だった。おそらく半分はジュリエットが男のジプシーだと分かって観に来ている在校生。もう半分はジプシーが男だと知らずに可愛らしい少女が主役だと勘違いして観に来た一般客。夢乃の考案した宣伝方法は、結構功を奏したようだ。予定通り順調に舞台は進む。途中、本当に即興でキスシーンを入れてやるうとしたが、あっさりやんわりアドリブで逃げられた。その辺はやはり奴の方が上手か。

最後のロミオが死んだ場面では、俺が驚く位に涙を流してジュリエットは泣いた。俺達が出会ってから一度も見たことがない奴の涙は、演技か、あるいは……演技なら、やっぱりこいつは相当な役者だ。

でもそのおかげで拍手喝采、舞台は大成功に終わった。

「普段から周囲の人を騙くらかしているだけあって上手いよね、迫真の演技だったあ」

変な言い方で、ほーりゆうはジプシーを褒めた。教室の椅子に座って、早速、何処かの模擬店で買ってきたらしいアイスクリームを食べている。

舞台が終った途端に講堂から控え室へ全力疾走で戻り、ジプシーは素早くドレスを脱ぎ捨て制服のズボンにはきかえる。上半身裸のまま頭から水道水をかぶりに行き、化粧も落として教室へ戻ってきたジプシーは、タオルで頭を拭きながら、ほーりゅうを睨んだ。

「さて、今回の俺の足を引っ張った件、どうしてくれよう」

「それ！　そこよ！」

珍しく、ほーりゅうが強気に出た。

「よくも私まで、変な術に巻き込んでくれたわね！」

「その前に動くなと言っただろ。動いたお前の責任だ！」

「あの時、動くなって言っただの、京一郎じゃん！　ジプシーは何も言わなかった！」

まあまあと俺は割って入る。

「ほーりゅう、確かに命を奪う程の術じゃなかったろ？　その辺の力加減はプロのジプシーを信用してだなあ」

「だからって何度もあんなのを食らったら、ホントに死んじゃう！　ぶんぶん怒っているほーりゅう。」

その時、ふと真顔でジプシーがつぶやくように言った。

「確かに、今回の術は強引だったか……」

「……でしょ！　何だ、反省してんじゃん」

意外そうに、でもちよつと勝ち誇ったように、ほーりゅうは言ったが。

「まあ、男一人だったら金縛り術系で動きを止めるつもりだったが、今回はお前の能力を試す目的もあったし。……そうだな、次からは先に結界をはって、周囲の被害が最小限に留まる様にしてから攻撃術を使うべきだな……」

「……今、さらつと酷い事を言っただよ、この男！　また同じ状況になつたら、絶対同じ様にやる気だあ！」

教室には舞台を終えたクラスの皆が戻ってきて、それぞれに興奮収まらない様子で話をしている。その賑やかさの中で、俺は二人の

やりとりを眺めていた。

こいつらも結構いいコンビだ。ほーりゅうのおかげか、昔はもっと何を考えているのかわからない程無口だったジプシーが、最近よく喋るようになった気がする。

チャプター・18 ほーりゅう

文化祭もお昼を過ぎた。私のクラスの講堂での舞台も無事に終わり、ざつと後片付けも終った所で、クラス単位としては自由行動になった。

殆どの人が、それぞれに友人と連れ立って教室を出て行き、後に残ったのは私と夢乃、そして京一郎とジプシーだけになった。

「夢乃！ お昼時だから何か食べに行こうよお」

私は早速、目的の模擬店巡り！ 何を食べようかな。

「ほーりゅう、お前って元気というか何というか、食い意地はってんなあ」

椅子に座り、机に寄りかかる感じで頬杖をついていた京一郎があきれたように言う。

「えー何で？ 京一郎は行かないの？ 早く行かないと売り切れちゃうよ」

「俺、何か午前中のゴタゴタと舞台ですっげえ疲れた。もうこの教室は誰もいないしさ、しばらくここで寝る。適当に起こしに戻って来てよ。また後夜祭も出番があるしさ」

あ、そうか。京一郎もジプシーも、後夜祭ライブに出るんだ。

「俺も今回パス」

ジプシーにしては珍しい。やっぱり先程の舞台の主演は疲れたか。

せっかくの文化祭なのに、見る側でも楽しもうという元気のない男子共。まあ、控え室となっていたこの教室には、一般は入って来ないはずだし。放つという文化祭を満喫しに、私は夢乃とまわろうと。

いろんな模擬店の美味しいものを食べて、講堂の舞台や文化部の

展示物を観て、そうそう、あのクラスが校内で撮影したって言う不思議の国のアリスの映画、上手に作っていたなあ。

でも気になって、やっぱり一応焼きそばの差し入れを持って、夢乃と教室に戻ってみる。あの二人、疲れていても何か食べないと。人間どうしたってお腹が空くもんね。

入り口まで戻って来ると、中で話し声が聞こえた。何だ、二人共結局寝てないのかなと思いつながら、ドアに手をかけようとしたが。

「で、ほーりゅうの事、どう思う訳？」

京一郎の声……私の事？ 思わず夢乃と顔を見合わせてその場にしゃがみこみ、聞き耳を立てる。

なかなかジプシーの返事がない……これはもしかして、男二人の恋愛話？

なんて思っている間に、ジプシーの声が聞こえた。

「前回の俺とお前の件、もともと俺が知識として持っていた媒体の石の件、そして今回試した結果としては、ほーりゅう自身に向けられた殺気や危害の加え方に対して出るんだと思う」

……？

「絶対的にサンプルが少ないから言い切れない所だが、攻撃される大きさによって超能力も比例して大きくなるかもしれない。あと、殺気を感じてから超能力が出るまでのタイムラグが気になるな。乱闘や、場合によっては、この数秒の遅れを知っている敵にでもあえばアウトだ。もう少し様子をみて、能力を使いこなせるようになる、何かしらの糸口が見つかればいいが」

…… ああ、そっちの、私の持っている制御不能な超能力の話か。夢乃も、なあんだと言うような顔になる。

ふーん、二人共、それなりに私の能力の事、考えてくれているんだ。

しかし、そう言えばこの二人って、恋愛話なんかするんだろうか。私の場合は、京一郎は既に友達感覚だし、ジプシーは根暗い性格だ

から、顔が良くても恋愛対象にはならないなあ。……そうだなあ、私だったら、手が当たっただけでも心臓がドキドキするような相手がいいなあ……。

なんて考えていると。

「何やってんだ、お前ら。遠慮せずに入ればいいだろ」

ドアを開けて、京一郎が立っていた。

ドキッとした私と夢乃は慌てて立ち上がり、それでも夢乃が落ち着いた声で言う。

「寝ていたら、起こしちゃ悪いかなあって、様子をね……」

ふうんと言う感じで京一郎は中に戻る。私も夢乃も、教室の中に入って行った。

「お昼にしては遅くなったけれども、焼きそば買ってきたの。食べる？」

夢乃が包みを開けて、お茶と一緒に用意をする。

「そうだな。もう少ししたらバンドのメンバーと合流しないといけないし。今食つといた方がいいか」

「二人共、休まなくて大丈夫なの？」

さっきまでへたばっていたのに。京一郎が夢乃から受け取った焼きそばをジプシーに回しながら言った。

「いや、一時間位は二人共爆睡。お前らが結構時間かけてまわってたんだよ」

感覚がなかったけれど、そんなに時間かっちゃっていたんだ。

その時、教室のドアが開いた。

一人、入り口に姿を見せたのは、二・三度しか見たことないけれど確か、この高校の生徒会長だ。……視線は私達の方を向いている。何の用だろう？

会長の姿を確認したと同時に、京一郎とジプシーに緊張が走ったのがわかった。そしていつもの無表情で、ジプシーが言う。

「足立先輩、一年の教室に何か御用ですか？」

余裕を見せるかのようにゆつくりと教室の中に入ってきた会長は、そんなジプシーに一瞥をくれて言った。

「貴様の件は後だ。そっちの茶髪、貴様が城之内だな」

なんか、場の雰囲気怪しくなってきた。私と夢乃が黙ってみている前で、会長の言葉が微妙に癪に触ったらしい京一郎が、ゆらりと立ち上がった。

チャプター・19 ほーりゅう

貴様の件は後だなんて言われたジプシーは、相変わらずの無表情で生徒会長を冷ややかに見る。ゆつくりと立ち上がった京一郎は、会長の正面へ向き直り眼光鋭く睨みつけた。

そんな京一郎に臆する色もなく、会長は言う。

「貴様、何人かの三年と組んで、後夜祭のライブに出るようだな」
ふうん。京一郎とジプシー、三年と組んで後夜祭に出るんだ。私も夢乃も後夜祭の詳しい話に加えてもらえなかったから知らなかった。

「それが、なにか、問題でも、あるんです、か」

挑発するようにわざと区切って言う京一郎。余計な事をするよなあ。

「メンバーの中に、千葉隆志と言うクラスメートもいるようだが、いつから貴様らの仲間になったかと思ってな」

千葉隆志？ 確かに、ウチのクラスにいる人だ。……でも会長、勘違いしてるって。フィギュアオタクという噂で多分クラスでは最も京一郎と相性の悪そうな男子。京一郎が今回組んでいる三年生達は全員、おそらく暴走族つながりだもん。絶対間違いだって。

「俺が誰とダチになるうと、足立先輩には、関係ない事っすよねえ？」

京一郎、それって肯定っぽい言い方だ。可哀想に、これから千葉君は会長の暴走族ブラックリストに載っちゃったよ……。

「まあ確かに、それは個人の自由だな」

そう言って会長は次に、ジプシーへと視線を移した。

私は詳しいことを聞いていなかったけれど、何度か会長と乱闘になりかけた事があるらしいジプシーは、会長の一挙一動全てに神経を尖らせているのがわかる。

「そう気色ばむな。今日は貴様とやりあう気はない」

会長は、そう言つと、制服のポケットから数枚の写真を取り出した。それを扇状に広げながら、ジプシーに見せつつ続けて言った。

「江沼、この写真をバラまかれなくては、貴様の正体を吐いてもらおう。……変な術は使うなよ」

私と夢乃は思わず、身を乗り出して写真を眺めた。……これ、さっきの舞台の写真だあ！　綺麗に撮れているジプシーの女装、ジュリエット姿のピン写真。会長つたら、もう現像したんだあ！　私は妙な所で感心した。

全く予期せぬ写真だったようで、先程までの無表情から一転、ジプシーの顔に羞恥の為の動揺が走った。

そんなジプシーの反応で充分満足したかのように、会長は写真をポケットに戻し、高らかに笑いながら、すばやく教室を出て行く。

「待て！」

慌てて追いかけて、教室を飛び出していくジプシー。残された私達は、啞然と見送った。

「……あの舞台、会長に限らず皆に写真をバシバシ撮られていると思っただけだ」

「というか、リアルタイムで舞台を丸々観られて……それどころか、学校側にビデオ撮られているかも」

「そんなに女装、嫌だったんだ。……ジプシー、写真を取り戻せたかな」

「いや、奴は校内では普段、病弱で体力なしのフリを通して、から、大勢の前で会長から写真を奪うという芸当は見せられねえだろ。そのうち手ぶらで戻って来るじゃねえかな？　今回の会長はどうやら、奴をからかう事が目的だったみたいだし」

京一郎はそう言つと、荷物を手に持った。

「俺、先に三年の先輩達と合流しとくわ。待たせる訳にいかねえし。奴が戻ってきたらそう伝えという。場所はもう伝えているから」

それを聞いた私は、思い出して言った。

「千葉君は？ 連絡済みなの？」

ちよつと意外そうな顔をした後、京一郎はニヤリと笑って言った。
「千葉は名前を借りただけだ。どうしても表舞台に、ジプシーは名前を出したくないってんでさ。舞台では髪型とか変えたりして誰もジプシーだと気がつかないようにするし、後で調べてもパンフの名前は印刷ミスって事だ」

…… 作為的に名前を騙られて、会長のブラックリストに載って……
千葉君がわいそう。でも、ライブで好評だったら、本人は何故だか理由が分からないままに、明日から千葉君、もしかしてモテモテさんかもね」。

そして、ふと思いついた私は何気なく言った。

「たぶんさあ、あの舞台の写真、私らの卒業アルバムに載るよね」

私の言葉に、京一郎があきれたように言った。

「お前、そんな先の話を……。俺らまだ、一年だぞ」

そう言いながらも、京一郎は視線を窓の外に移し、遠い目をした。

「…… そうだな。卒業の頃には、ジプシーの奴、懐かしくアルバムの中の写真を眺める事が出来るようになっていたら、いいよね……」

京一郎は、一体何に対して何を思い出し、何が言いたいのかなと思ったが、私に分かる訳がない。

なので。

「それってジプシーが、女装を恥ずかしいって思わずに写真を見る事が出来るって事？ それとも、自分は美人だなあって写真を眺められるようになるって事？」

京一郎は、一瞬びっくりしたように私を眺めたが、急に笑いながら座っている私の頭の上に手を置き、くしゃくしゃと撫でて、教室から出て行った。

…… 何すんのよ！ 髪が乱れたじゃん！

チャプター・20 ほーりゅう(完)

昼間の文化祭は盛況に終わった。ちよつと午前中にアクシデントもあつたけれども、それはそれ、この高校の文化祭とは別口だし。

後夜祭。出場しない私と夢乃は、京一郎とジプシーとは別行動だから遅めに行つて、全体が見渡せる講堂の一番後ろで見ることにした。ライブは嫌いじゃないけれど、私も夢乃も最前列を取つて観たいタイプじゃないし。

まだ時間はかなりあるのに、既に講堂の中は熱気というものが溢れている感じがした。後夜祭を楽しみにしている子達が、それだけ多いって事なんだな。

伝統的に毎年こうなんだって聞いた。だから、後夜祭のライブで舞台に出られるグループは、すごい競争率なんだそうだ。そんな中でよく出られたもんだ。メンバーの三年が役員を脅してもしたんだろつかと思つちゃう。

「オリジナルの曲じゃないって。二曲ともカバーらしいわ。だつて、京一郎が作つたら軽すぎる歌詞になるし、ジプシーが作つたら聴いていられない程根暗な歌詞になりそうだからって」

夢乃がそう言ったので、後夜祭用に入り口で配られた一枚モノのパンフを見る。ふん。最後から二番目ね。あ、でも私の知らない曲名だなあ。聴いたらわかる曲なのかな。

……本当にパンフではメンバーの所、ジプシーの名前がなくて、偽名の千葉君になつて。今日の出来栄えによつては、名前を騙られた千葉君は校内で有名人になるかもね。

外はすっかり暗くなった頃、後夜祭の舞台が始まつた。

競争を勝ち抜いてきただけあつて、どのグループも皆つまみ。

私も夢乃も、充分に楽しんでた。当然、この中の何処かで、明子ちゃんも楽しんでいるんだろうなあ。あれだけ後夜祭ライブを楽しみにしていたんだもん。

そして、京一郎達のグループが出てきた。

ちよつと照明を落としきみで逆光っぽくしている。顔がわからないように、わざとかな。

京一郎が持っているのは、あれはエレキギターっていうのかな。よくよく見て、ドラムとキーボードとベース……皆、少々京一郎の先輩っぽい族の雰囲気が入っているから、きつと三年。じゃあ、ジプシーがボーカルなんだ。サングラスかけて、髪の色や形を変えて確かに、あれなら誰かわからないや。

曲が始まる。……どこかで聴いた事のある様なノリ良い曲。

歌が始まる。

知らなかった。ジプシーって、歌が上手なんだ……。

私も夢乃も、曲と一緒にあって歓声を上げた。

まだ短い付き合いだけけど、京一郎は、あの年にして充分自分の人生を楽しむ術を知っている感じがする。

辛くて語れない過去が、他にもまだ彼にあるんだとしても。

どうか、ジプシーの未来に、明るい光あれ！

「文化祭、終ったねえ」

そろそろ、暖かい日差しを浴びても肌寒く思える屋上で、私は伸びをする。これからは、雨の日にだけお弁当を食べる為に使っている自習室で、昼休みを過ごす事になりそうだ。

「ジプシー、演劇部の勧誘がすごいんだって？ 逃げ回ってるらしいね」

私は、ぼんやりと柵越しに街並みを眺めているジプシーに言った。
「演劇部の連中って、男としてのジプシーが欲しいんだろうか、それとも女装したジプシーが欲しいんだろうか？」

とっても嫌そうな眼で、ジプシーが私を一瞥した。

あれから千葉君は、訳もわからないままモテていた。あの様子では、後夜祭に出たのが千葉君ではないとバレるのは時間の問題かな。もう一人、文化祭直後から、とてもモテ始めたのはジプシー。舞台のジュリエットを観て、皆一目ぼれしたんだろうなあ。それも男女を問わず、毎日ラブレターが届くようになってしまった。机の中に入っていたり、校門で手渡されたり。

毎日届く手紙が、いい加減一日で二桁を越すようになる頃、騒がしさを嫌うジプシーの為に、ある日、わざわざ皆の前で、京一郎が大声で言った。

「おっ！ ジプシー、手紙が沢山来るなあ。護摩木の代わりに、手紙を燃やす気かあ？」

一斉に、場が凍りついた。

それから、手紙はぱったり来なくなった様子。さらには、今までの手紙を返してくれと泣きついてきた男子もいたらしい。

でも京一郎も、もっと言い方があるのにな。もともと変人扱いだったのに、ますますジプシーが怪しい人だと思われちゃうよ。

ぼんやりと日向ぼっこをしていたら、ふと思い出したかのように、

京一郎が私に向かって言った。

「ほーりゅー」

「？ 何」

真剣そうな顔の京一郎。真面目な話なんだろうか。

……なんだろう。

「とりあえず、文化祭も終わった事だし、期末試験に向かって勉強す

るかあ？」

「……ええ？ 試験なんて、まだまだ先じゃん！」

「お前の前回のペースを見ていたら、今からやらねえと試験範囲が終んねえの！ 大きなイベントが終わった事だし、今日から学校退けたら試験勉強始めるぞ！ この俺様が責任持つて、みっちり叩き込んでやるからさ」

……そんなの、いやだあああ！

チャプター・20 ほーりゅう(完)(後書き)

ご愛読、ありがとうございました。

続編「ジプシーダンス」を、お楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0823d/>

最終舞台は華やかに

2010年10月8日15時29分発行